

形而上学的犯罪小説—コーマック・マッカーシー『老人の住む国にあらす』論

大野 真¹

本論は、アメリカの作家、コーマック・マッカーシー (Cormac McCarthy) の長編小説『老人の住む国にあらす (No Country for Old Men)』(2005年)を扱う。

コーマック・マッカーシーは、1933年生まれ。初期の作品は玄人筋での評価は高かったものの、一般人の間ではあまり読まれていなかった。しかし、1992年の『すべての美しい馬 (All the Pretty Horses)』がベストセラーになり、知名度が高まる。これは西部劇的な背景の中で、一人の青年の燃えるような恋愛を描いた青春小説である。その後、作者は続編の『越境 (The Crossing)』(1994年)と『平原の町 (Cities of the Plain)』(1998年)を発表し、『すべての美しい馬』から続く「国境三部作」を完成させる。

さらに、犯罪小説的な『老人の住む国にあらす』(2005年)、人類の多くが死に絶えた荒廃した世界を生き抜こうとする父と子の姿を描いた『ザ・ロード (The Road)』(2006年)といった話題作を出版する。

マッカーシーの作品は、西部劇や青春小説、犯罪小説といった大衆小説的な娯楽要素を取り込みながらも、その中で、生と死の問題、運命や超越的存在(神)についての哲学的考察を行っている点に特徴がある。

第1章—『老人の住む国にあらす』の時代背景と地理的背景

「国境三部作」の完成後に発表された『老人の住む国にあらす』は、いわゆる犯罪小説といえる内容を持つ。あらすじはシンプルだ。主人公ルウェリン・モスは、ある日、メキシコとの国境近くで、麻薬密売人たちの間の銃撃戦によって撃たれた車両と男たちの死体を発見する。車両には多額の現金が残されており、モスはこれを運命の転機と考えて、その金を持ち逃げしてしまう。その結果、モスは恐るべきプロの殺人者であるアントン・シュガーという男に追われることになる…といった筋書きだ。特に殺人鬼シュガーの繰り広げる数々の殺りくの場面の描写は、「屠殺場 (slaughterhouse)」(105)に喩えられているように、非常に迫力がある。

作者は、以上のような追う者と追われる者のシンプルなストーリーの背後に、興味深い時代背景や地理的背景を織り込んで、物語に厚みを与えている。

まず、時代背景を考えてみると、ベトナム戦争との関係が注目される。(なお、この作品内での現在は、1980年頃と推定される^{注1}。)主人公のモスはベトナム戦争の帰還兵である。ベトナム戦争では優秀な狙撃兵であったが、帰還後は「溶接工 (welder)」(155)として働き、現在は引退して平凡な市民としての生活を送っていた。しかし、この小説の冒頭にあるように、ある日偶然に麻薬密売人たちの争いで残された大金を手にする事で、運命が変わって逃亡生活に入り、彼を追う殺人鬼シュガーの繰り広げる殺りくの世界に巻き込まれていく—いわば、再び戦場の世界へと入っていく

¹薬学部第2英語研究室

のだ。

なお、この小説では、ベトナム戦争以外に第2次世界大戦というもう一つの大きな戦争も扱われている。逃亡者モスの行く手を追跡する保安官エド・トム・ベルは、第2次世界大戦に従軍した経験がある。ベルは「戦場の英雄 (a war hero)」として受勲されているが、実際は分隊の仲間全員を失っていたことを苦々しく告白する。「俺は戦場の英雄ということになっていたが、分隊の仲間全員を失った。そのおかげで受勲されたんだ。仲間は死に、俺はメダルを得た」(195)。

ベルは、自分が生き延びるために、やむを得ないことではあったが、戦友たちを置き去りにすることを「選択 (a choice)」したのである(277)。ベルの心の中のトラウマになっているこの体験は、戦場での栄光が犠牲者の死の上に成り立っているという皮肉な本質を明らかにしている。また、ベトナム戦争の帰還兵であるモスを追跡する保安官として、第2次世界大戦の経験者であるベルを設定することにより、時間的な厚みを小説に加えているのだ。

さて、次にこの作品の地理的背景を考えてみた場合、メキシコとの関わりが注目される。主人公モスが偶然大金を手に入れたのは、麻薬密売人どうしの争いが原因であるが、その背後には「メキシコ人の麻薬密売人 (Mexican drugrunners)」(73) や「メキシコ産の茶色の麻薬 (mexican brown dope)」(74) の存在がある。

メキシコから合衆国へと密輸される麻薬が問題になっているため、メキシコとの関わりにおいても、とくに国境地帯に焦点が当てられる。この小説の冒頭で描かれた麻薬密売人たちの争いも、メキシコとの「国境地帯 (borderlands)」(8) で起こったものなのである^{注2}。

なお、メキシコから密輸される麻薬に関しては、学校の子供たちにも麻薬が蔓延している事態が作品中で示唆されている。「麻薬か。／連中はそいつを学校の子供たちに売っているんだ。／もっと悪いさ。／どうしてだい？／子供たちが麻薬を買うんだ (Schoolkids buy it.)」(194)。需要なくして供給なし。子供の側からの麻薬の需要が大きいのである。

なお、学校の現状については、学校で問題になっている事柄が、40年前には教室内でのおしゃべりや廊下を歩くことやガムを噛むことや宿題の丸写しといった類のものだったのに、現在では「レイプ、放火、殺人。麻薬。自殺。(Rape, arson, murder. Drugs. Suicide.)」(196)である旨が述べられている。麻薬の問題は、メキシコという地理的背景と共に、時代背景の変化にも絡まっているのである。

第2章—ハードボイルド小説としての『老人の住む国にあらず』

さて、麻薬に侵された社会やすさまじい殺人と暴力の場面を描くという点で、『老人の住む国にあらず』は一種のハードボイルド小説と言えるだろう。

ハードボイルド小説は20世紀初頭のアメリカで誕生したジャンルの小説で、現代の混沌とした暴力や死の世界を非情なタッチで描くものである。いわゆる純文学系のハードボイルド小説としてはアーネスト・ヘミングウェイの作品があり、大衆小説系のハードボイルド小説の典型としてはダシール・ハメットの『赤い収穫』(1929年)や『マルタの鷹』(1930年)といった探偵小説がある。とくにハメットの作品は、タフでしたたかな探偵が暴力と悪の渦巻く世界をしぶとく生き抜いていく姿を、感傷を排した乾いた文体で描いている。(なお、村上春樹に影響を与えたレイモンド・チャン

ドラーの作品もハードボイルド探偵小説の系統に属するが、ハメットに比べると感傷的な要素が強い。))

さて、ここでハードボイルド小説を仮に純文学系と大衆小説系という具合に分類したが、それはもちろん便宜的な分類であり、両者は交流する場合もある。ヘミングウェイの書いた短編「殺し屋」(1927年)は、探偵小説に登場するような殺し屋を描くことによって、純文学的な「死の恐怖」の主題を探究したものである。さらに、純文学系の難解な小説を書く作家が、大衆小説的なハードボイルド探偵小説の要素を取り入れた作品を書く場合もある。例えば、ウィリアム・フォークナーは、『響きと怒り』(1929年)において、物語中の時間を解体する前衛的な手法を用いて難解かつ深遠な作品を書いたが、その後の『サンクチュアリ』(1931年)では、ハードボイルド探偵小説的な雰囲気や漂わせながら、女子大生のレイプ事件やアルコール密造にまつわる犯罪者たちの闇の世界を描いているのだ。

なお、フォークナーは、『白鯨』を書いたメルヴィルと並んで、マッカーシーに大きな影響を与えたと考えられる作家である。マッカーシーも、フォークナーの例に倣って、ハードボイルド探偵小説という大衆小説的要素を取り入れつつ、自らの純文学的主題を探究していったとも考えられるのだ。(このことについては、後に詳しく述べる。)

さて、『老人の住む国にあらす』のハードボイルド探偵小説的要素について、さらに具体的に考察していきたい。

ハードボイルド探偵小説的な側面としては、もちろん、殺人と暴力の渦巻く混沌とした世界を描くという主題の面もあるのだが、その世界の描き方にも特徴がある。

まず、目をそむけたくなるような殺人や暴力の場面でも、感傷を入れずに淡々と描く。暴力や死という事実をひとまずはクールに受け止めるのだ。また、登場人物の心理描写を控えて、セリフや外面的描写によって心理を暗示する。『老人の住む国にあらす』の場合、とくに殺人鬼シュガーの描き方において、シュガーの心理はほとんど描写されていない。それにより、シュガーが果たして何を考えているか読者にはつかみにくくなり、正体不明の死の使者としての不気味さがいっそう強まるのだ。

人間的な内面の心理描写を控えて、即物的な外面的描写を用いるために、ハードボイルド探偵小説の登場人物たちは、非情な印象を与える。そして、人間というよりは野獣や機械に喩えられたりもする。ハードボイルド探偵小説には銃器が数多く登場するが、メカニカルな登場人物たちは人間よりもむしろ銃器との親和性が強いように思われる。『老人の住む国にあらす』においても様々な銃器が用いられるが、それらの機能のリアルな描写には、銃の国アメリカに住む作者のこだわりが感じられる。

さて、ハードボイルド探偵小説の登場人物たちは、非情であるとともに、プロ意識が強く、自らの能力に対して誇りを持っている。何を考えているのか把握しがたい殺人鬼のシュガーではあるが、プロの殺し屋・仕事人としての自分の能力には強烈な自負心があるようだ。シュガーは、モスから取り戻した金を麻薬密売業の黒幕とおぼしき男に渡す際に、自らのことを以下のように自己紹介する。「ああ、俺がやってきた目的は、自分の誠意をはっきりと示すためだ。困難な仕事における専門家として、全面的に信頼できて全面的に誠実な人間としてだ。俺はそうした人間だ」(251-252)。ま

た、次のようにも断言する。「俺には敵は存在しない。俺はそんなものを認めない」(253)。

ところで、プロの仕事人という観点から見ると、『老人の住む国にあらす』にはもう一人、カーゾン・ウェルズという、シュガーに比肩されるような高い戦闘能力を持つ男が登場する。ウェルズは主人公のモスと同様にベトナム戦争の体験者であったが、モスが狙撃手で帰還後は溶接工として民間人の生活を送っていたのに対し、ウェルズは「特殊部隊 (special forces)」(156) の出身で、帰還後はいわばプロの「殺し屋 (a hit man)」(156) として、特殊部隊上がりの技能を生かしていたのである。ウェルズも十分にハードボイルド小説の主人公となりうる人物といえるが、彼とシュガーとの相違を考えることによって、ハードボイルド探偵小説を超えたシュガーの人物造型、あるいは『老人の住む国にあらす』という小説の特徴に光を当てることができるだろう。この点について、次章以下で論じてみたい。

第3章—ハードボイルド小説を超えた『老人の住む国にあらす』

前章の最後で述べたように、ベトナム戦争での特殊部隊出身の殺し屋であるウェルズは、ハードボイルド小説の主人公となってもおかしくないような人物である。

麻薬密売業の黒幕とおぼしき男に金を取り戻すことを依頼されたウェルズは、負傷したモスを探し当てて訪ね、自己紹介したうえで次のように言う (148-149)。

(ウェルズ) : 俺なら奴 [シュガー] を追い払えるよ。

(モス) : それなら俺が自分でできるさ。

(ウェルズ) : 俺はそうは思わない。

ウェルズは特殊部隊出身のプロとしての自分の能力について強い自負心を持っており、帰還後は民間人として暮らしていたモスとの差を強調するのである。ウェルズは、殺しのプロとしての自らの技能がシュガーに勝るとも劣らないと思っているのだ。

しかし、そのウェルズも、意外とあっけなく、シュガーに散弾銃を突き付けられて捕らえられ、問答を交わした後に射殺されてしまう。ウェルズがシュガーによって顔を撃ち抜かれ、脳を流出させて死ぬ場面は、この小説の中で最も印象に残る死の描写の一つであると思う。「シュガーは彼 [ウェルズ] の顔を撃ち抜いた。ウェルズのそれまでに知ったり考えたり愛したりしたもの全てが、背後の壁をゆっくりと流出していった。母親の顔、最初の聖餐式、知り合った女たち。彼の前でひざまずきながら死んでいった男たちの顔。よその国の道路際の側溝で死んでいた子供の死体」(178)。

この描写を読むと、特殊部隊出身の殺し屋であるウェルズにも、母親や愛した女たちへの思いがあり、また任務の中で殺していった男たちや犠牲になった子供に対する胸の痛みらしき感情があったことが推測される。ハードボイルド的な非情の殺し屋であるウェルズにも、人間的な様々な感情や思いがあり、その中で殺人の任務を果たしていったのだ。しかし、そうした人間的な記憶の全てが、死によって、脳という物質の流出によって消失してしまう。「死」という事実の非情さは、ハードボイルド的な人間の非情さを超えたものであることを、この場面は示しているのである。

そして、ウェルズを射殺したシュガーは、人間というよりも、人間を超えた「死」という超越的な事象に属している存在のように思われる。生きていた時のウェルズがシュガーを評した言葉を考えてみよう。ウェルズは、自分を雇った黒幕の男との会話の中で、シュガーのことを「精神病の殺

人鬼 (a psychopathic killer)」(141) という具合に片づけている。しかし、その後でモスに会った時には、単なる狂気の殺人鬼としてよりは、何かしら独特の超越的な行動原理に基づいて動いている人間だと評している。「奴は変わった男だ。奴には原理 (principles) があるとさえ言えるだろう。金とか麻薬とかそうした類のもの的一切を超えた原理だ」(153)。

金銭欲などの人間的欲望を超えた原理で動いているシュガーは、通常の人間を超えた存在であると言えよう。さらに、シュガーについての警察側から見た描写を検討してみよう。まず、警察側にとって、シュガーはとらえどころのない存在として描かれる。例えば、シュガーを見た人間が皆死んでしまうため、シュガーの人相は分からないと保安官ベルは言っている (192)。また、物語の後半で、実際にシュガーを目撃した重要な証人として、自動車事故で負傷したシュガーを見た少年たちが登場する。保安官ベルの質問に対して、一人の少年は以下のように答える。「あいつは中背で、中くらいの体つき、引き締まっている感じ。たぶん 30 歳代半ばぐらい。黒い髪。濃い褐色だと思う。よくわからないけどね、保安官さん。誰にでも似ているような外見だよ」(292)。つまり、外見上のシュガーはとくに長身で筋骨隆々とかいうわけでもなく、中肉中背のよくありがちな外見であることが強調されているのである。(ただし、外見上は普通でありながら、相手に有無を言わずに従わせるような威圧感がある旨を少年は付け加えている。)

このように、シュガーは外見上は取り立てて特徴はなく、また、作品中でシュガーの来歴についても具体的に述べられていない。いわば、シュガーの人間的特徴はぼやかされており、正体不明の存在なのだ。

シュガーが人間を超えた存在であることは、ウェルズを射殺する前に二人で交わした問答の中でも示されている。「死」について、二人は以下のように言葉を交わす (177)。

(ウェルズ)：お前〔シュガー〕は死の外側にいるわけじゃない。

(シュガー)：それ〔死〕が俺にとって持つ意味は、お前にとって持つ意味とは違う。

(ウェルズ)：お前は俺が死ぬことを恐れていると思っているのか？

(シュガー)：そうだ。

シュガーは死を恐れる人間の側というよりも、死の恐怖を超越し、「死」そのものの側に立っているようだ。シュガーは文字通りに「死の使者」なのである。

なお、マッカーシーの文体の特徴として、登場人物のセリフを引用符でくくらない独特の書き方がある。上記の引用の和訳では、分かりやすいように誰のセリフかを補って明示したが、原文で読んだ場合には、二人のセリフが混然として一体化し、人間としてのウェルズが、死の使者であるシュガーを媒介にして、死について自問自答しているような効果を与えている。

「死」そのものの具現者といえるシュガーという存在は、人間を超えた超越的なものに対する作者の関心を示しており、娯楽小説としてのハードボイルド探偵小説を超えた、いわば純文学的な重い主題を示している。作者は大衆小説的な要素を取り入れて読者を楽しませる一方で、死や運命、神といった超越的なものと人間との関係を深く探究しようとしたのである。この点については、さらに次章以下で考察していきたい。

第 4 章—死と運命、選択

「死の使者」としてのシュガーには、奇妙な習慣がある。つまり、相手を殺す前に、コインを投げて相手に表か裏かを答えさせ、当たっているか否かで命を助けるかどうかを決めるやり方である。(もちろん問答無用で殺してしまう場合も多く、あくまで余裕があって気が向いた時の習慣である。)

一つ目の例として、シュガーは、たまたま立ち寄ったガソリンスタンドの店主と会話をした時に、25セント硬貨で「コイン投げ (a coin toss)」(55)を行って、相手に表か裏かを無理やりに言わせる。答えが当たれば死を免除し、当たらなければ殺してしまうつもりなのだ。「コイン投げ」をする理由が分からずに戸惑う店主に対して、シュガーは「お前は自分の一生をそいつに賭け続けてきたんだ。お前がそれを知らなかっただけなんだ」(56)と言う。結局のところ、店主は「表」と正解を答えたので死を免れるのだが、シュガーが言うように、店主は自ら認識しないままで、1958年の製造後に22年間人手を渡ってきた1枚のコインという些細なものに命を賭けていたことになるのである。シュガーは続けて言う。「どんなものでも〔運命を決める〕道具になりうるんだ、とシュガーは言った。些細なものだ。自分で気づきさえしないようなものだ。人の手から手へと渡っていくものだ。人間はそれに注意を払いもしない。そしてある日、清算 (an accounting) が訪れるんだ。その後は全てが変わってしまう」(57)。ここでのシュガーは、「死の使者」であると同時に、「運命の使者」でもある。

シュガーがモスの妻であるカーラー・ジーンを殺害するために現れる際にも、コイン投げが印象的に用いられる。シュガーは既にモスを殺して金を奪い返しており、本来はモスの妻まで殺す必要はない。シュガーがモスの妻を殺そうとするのは、以前に彼がモスと電話で話をした際に、金を返さなければ女房にも責任を取らせると言い(184)、結局のところモスが金を持ってこなかったためである。そのことをシュガーは彼流に、「お前の亭主はな、がっかりするかもしれないが、お前から災いを取り除く機会があったのに、そうしないことを選んだんだ」(256)と解釈するのである。つまり、モスは妻の死を選択した、妻の死を望んだ、という解釈で、シュガーは夫の選択を実行しに来ただけというわけだ。

そしてシュガーはコイン投げをして、モスの妻に表か裏かを言うように迫る。結果は外れであった。シュガーはモスの妻に言う。「お前の人生の全ての瞬間が分岐点 (turning) であり、だれもが選択をするんだ。どこかでお前は選択をした。全てがここに至っているんだ」(259)。そして、さらに続けて、「俺がお前の人生に現れた時に、お前の人生は終わったんだ」(260)と宣言し、モスの妻を射殺してしまうのである。

「死の使者」でもあり「運命の使者」でもあるシュガーの存在は、生と死という個人にとっての最大の重大事でさえも、「コイン投げ」に象徴されるような運命のいたずらによって、180度変わってしまうことを示唆している。

この小説の主人公であるモスにしても、麻薬密売業者たちの争いの結果残された多額の現金をたまたま偶然に目にしたことによって、それまでの人生が変わってしまう。「彼の全人生が目前にあった。毎日毎日、朝から晩まで、死ぬまで。そうした人生の全てが、40ポンドの札束に集約されて鞆の中に入っていた」(18)。また、モスは以下のようにも自問自答している。「百歳まで生きたところで、と彼は言った。こんな日は二度とはないだろう」(20)。結局のところモスは現金を持ち逃げす

ることを選び、警察だけではなく殺し屋のシュガーにも追われることになる。後になって、モスは逃避行の最中に出会った少女に対して、次のように告白している。「3週間前までは、俺は法を遵守する市民だったよ。9時から5時までとか、8時から4時までとかの仕事をするようなね。けれども起こるべきことが起きたんだ。前もって尋ねてもくれなかったし、こちらの許可を取ろうともせず（220）。その後モスはシュガーに殺されるのだが、つまり結局、モスは現金を持ち逃げするという自らの「選択」によって、それまでの人生が180度変わってしまい、死に至るのである。

けれどもモスの場合、その運命は自ら選択したものである。一方、モスの妻については、シュガーによると、モスが金をシュガーに渡さなかったことによって、妻の死を「選択」したという理屈であった。さらに、シュガーはコイン投げを行って、モスの妻に表か裏かを当てさせて、外れたために殺してしまう。これもシュガーによると、モスの妻は自らの死を「選択」したということになってしまうのである。

この辺りのシュガーの理屈は、常人には理解しがたい超人間的な論理に基づいており、人間と運命との間の断絶を示している。マッカーシーの作品世界において、運命や神といった超越的存在の業は人間には理解が及ばず、死の使者であるシュガーの不可解さは、シュガーが人間よりもむしろ超越的存在の側に属することに由来するのである。

人間は自ら意図して、あるいは意図せずして行った「選択」によって、生死の違いを含めて、人生がガラリと変わってしまう。運命に翻弄される人間は不安定な存在であり、その不安定さを抱えて生きる以上、一つの場所に身を落ち着けて、将来を当てにして堅実に生活を築くことは空しい幻影のようにも思えてくる。ふとした運命のいたずらによって、それまでの生活が崩れ去ってしまうかもしれないからだ。あるいは、この小説のように死の使者であるシュガーの如き殺し屋に出くわさないまでも、致命的な病に突然かかる可能性は、我々の実生活においてもありうることだ。

このような不安定さの認識を基調とするマッカーシーの作品中の世界観は、定住者的なものではなく、ノマド（遊動民）的なものであると言えよう^{註3}。ノマド的な世界においては、人々は移動を続け、移動をする中で戦ったり、あるいは、ゆきずりの激しい恋をする。例えば、マッカーシーの国境三部作は青年の放浪と恋愛を中心に描いたものであり、本作『老人の住む国にあらす』や『ザ・ロード』は、登場人物たちが移動をする中での戦いを主な出来事としている。

第5章—夢と啓示

さて、人間と超越的存在（死と運命、神など）の間には断絶があるので、超越的存在からのメッセージは、人間にとって理解しやすい言葉によってというよりも、夢のお告げによって象徴的に啓示されるという形をとったりする。

マッカーシーの作品全般において「夢」は重要な役割を果たすが、この小説でも、モスの妻が夫となるモスとの出会いを夢で予告されたと回想したり（131-132）、あるいは最終章で、保安官ベルが死んだ父親についての夢を2度見たことを語る場面がある。特にベルが死んだ父親について見た2番目の夢は象徴的で、その中でベルは寒い夜の山道を馬に乗って歩いていき、父親が「牛の角の中の火（fire in a horn）」を運んでベルを追い越し、行く先で「火を焚いて（make a fire）」ベルを待っていてくれる（309）。父が子に伝えるべき、暗闇の中での「火」とは何であろうか。殺りく

の場面に満ちたこの小説の最後に、それでも何かしらの希望の可能性を暗示しようとしたのであろうか^{注4}。また、闇に満ちた世界の中を旅する親子の姿は、次作の『ザ・ロード』の設定にも通じている。

本作『老人の住む国にあらず』は、犯罪小説あるいはハードボイルド探偵小説といった大衆小説的な要素を盛り込んで読者を引きつけながらも、その中に運命や死といった超越的な存在に対する独自の思索を展開し、大衆小説的側面と純文学的主題の両方を兼ね備えた作品になっていると言えるだろう。

【注】

1. 1958年製造のコインが、22年間様々な人手を渡ってここに来た、という旨の記述が作品中にあるため(56)。
2. Stephen Tatum は、国境に沿ったこうした争いが、歴史の中で人為的に作られた国境を「不安定化 (destabilize)」することを指摘している(78-79)。また、大地真介もこの作品で犯罪者が国境を越えて南部にやってくることに注目し、「マッカーシーは、フォークナーの次の段階として、〈国境〉という境界も激しくゆらぐ一層複雑化した南部を描いている」と述べている(129)。
3. Lasvill-Andersen は、「ノマド」の概念をキーワードにしてマッカーシーの作品を分析している。彼によると、シュガーはノマドであり、不意に犠牲者の前に現れる理解不能な存在、「犠牲者たちがもつ世界や理性的行為についての既成概念を容易に揺るがす (destabilize)」存在なのだ(96)。
4. Julius Greve は、マッカーシーにおける「火を運ぶ」というイメージを、人類に解放をもたらしたプロメテウスの火の神話と比較しつつ論じている(228)。

【引用文献】

Greve, Julius. *Shreds of Matter: Cormac McCarthy and the Concept of Nature*. Hanover, New Hampshire: Dartmouth College Press, 2018.

Lasvill-Andersen, Toke Kristoffer. *Cormac McCarthy's Nomads*. Printed in Japan: Independently Published, 2018.

McCarthy, Cormac. *No Country for Old Men*. 2005. London: Picador, 2007. (なお、翻訳としては下記のものがある。コーマック・マッカーシー『血と暴力の国』黒原敏行訳、扶桑社、2007年。)

Tatum, Stephen. “‘Mercantile Ethics’: *No Country for Old Men* and the Narcocorrido.” *Cormac McCarthy: All the Pretty Horses, No Country for Old Men, The Road*. Ed. Sara L. Spurgeon. New York: Continuum, 2011. 77-93.

大地真介『フォークナーのヨクナパトーフアの小説—人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎ』彩流社、2017年。